

語り直す「実世界とテキスト」

森田 均

長崎県立大学国際情報学部

1. はじめに

ことば工学研究会とどうもじっくりと行かなくなって来ているようだ。

きっかけは、ことば工学と合同で開催した LCCII 第 20 回定例研究会であった。初対面であるのにどうにも押しの強い若者が発表を始めたが、意見を求めたいと言っておきながら自分にとって都合の悪いものは切り捨てていた。のみならず、司会のような振る舞いまで始めて会場から一斉に不快の念を示されると、これを受け流すかのように自分の出番が終わると即座に姿を消した。この傍若無人な若者を次に見かけたのは歓楽街の中。二度ほど同席したが、5 分と経たずに私の方からご免被った。

ことば工学の司会者は、この若者に何か借りでもあるのだろうか。言動の全てを肯定し、翌日この若者が先に帰ると、後はどうでも良いかのようであった。実際のところ私は、「お前などいなくてもこの場には何の影響も無い」と明言されたので、これを受けて席を辞した。杯を傾けずに酒場を出たのは、生涯初であった。

2. 人工知能学会全国大会

この出来事から 3 カ月過ぎて、人工知能学会が長崎で全国大会を開催することになった。<112-OS1b オーガナイズドセッション「OS-1b ことば--コンピュータ--コミュニケーション 2」(13:00-18:45)>これが私の研究発表を予定していたセッションである。実際には第一部から、つまり<111-OS1a オーガナイズドセッション「OS-1a ことば--コンピュータ--コミュニケーション 1」(09:15-10:20)>の開始時刻前から同じ会場に座っていた。

私が発表する順番は、この日の最後の予定であった。しかし、充分な時間管理もなされないままに進められたセッションは、私の開始予定時刻を 1 時間過ぎて二つ前の演者が発表をしているという状態であった。時間が遅くなるのは仕方が無い、と辛抱強く待っていると、ようやく私の順番となった。ところが発表を始めて 5 分ほど経過すると、非常に厳しい顔つきをした男が会場に入ってきて、ことば工学の司会者に詰め寄った。「もう時間がずいぶん過ぎていますので」という私にとっては理由にもならない台詞によって、発表は打ち切りとなった。ここで、司会者からも、その険しい顔つきの男からも、そして続いて入ってきた大会役員と思しき人々の誰一人からも、発表が途中で打ち切りとなったことに対して謝罪する言葉は発せられなかった。

一般研究発表は、研究者の自発的な意思によるものであり、プログラム中で最も尊重されるべきものであるはずだ。我々は発表のために費用を負担して全国大会に参加している。発表をするために参加している。しかしその発表が途中で大会関係者によって阻止されたわけである。発表内容に問題があるのなら査読はどうなっているのか。私の言動に、大会から排除されるような不適切な点があったのだろうか。想いは乱れながら会場を後にする他は無かった。研究上でこれ以上の理不尽な扱いを、しかも私の生活する街で受けるとは、大きな屈辱であったと受け止めている。

3. 予稿の在り処

その発表の予稿は、ここにある。

<https://kaigi.org/jsai/webprogram/2010/pdf/393.pdf>

あの日以来、ことば工学の司会者からも人工知能学会の会長からも不手際を詫げるなどという対応はまるで無い。不手際など無かった、いや私などそこに存在しなかった、ということになるのだろう。不在の在は望むところである。しかしせっかく準備した発表なので LCCII 大阪 2010 で披露しておきたい。

4. 今後の展望

ことば工学とは 11 月に長崎でまた合同研究会を行うことになっている。合同という申し出を何事も無かったかのように受けたのは、やはり私の存在を無視しているからなのだろう。私の生活する街でどのようなことが起きるのか、これはまた楽しみではある。出来れば人工知能学会会長の謝罪表明から合同研究会を始めてもらいたいと思っているが、これを読むだろうか。ことば工学が誠意を欠いている今、上部組織である人工知能学会の理事会が研究者として最低限の礼を尽くすことを期待している。

参考文献

[森田 10] 森田均:実世界とテキスト,人工知能学会全国大会(第 24 回)論文集 CD-ROM, 2010.